史料にみる三宅氏と三宅城

木村　健明

１．はじめに

昨年度、茨木城及び茨木氏に関する史料の収集を行った（木村 2022）。今回は、茨木市内に所在するもう一つの主要な城郭といえる三宅城及び三宅氏に関する史料の収集を行った（註１）。

史料の収集は『摂津市史』史料編一（摂津市 1984）、『新修　摂津市史』第一巻（摂津市 2022）、『新修 茨木市史』第一巻・第四巻（茨木市 2003・2012）などを参考にして、各出典文献から行った。

２．応仁・文明の乱までの三宅氏

三宅氏の現時点での初見は『兵範記』嘉応２年（1170 年）４月２日条である（表１－史料１・以下表番号は省略し、史１と記述）。平信範が箕面寺に参拝した帰途、三宅助真の元を訪れている。助真邸の位置は不明だが、平信範は翌日に総持寺を参拝しており、両寺の間の地域に助真邸が存在したと考えるのが自然であろう。また、５年後の承安５年（1175 年）に慈徳寺領味舌庄内の佃への「助真」の押妨が停止させられている（史２）。

味舌は現在も摂津市に地名が残っており、三宅助真は茨木市南部から摂津市にかけての地域を勢力範囲にしていた可能性がある。この地域は、室町時代以降に活躍する三宅氏の本拠であるが、12 世紀の三宅助真とのつながりを示す史料は確認できておらず、今後の課題であろう。

次の史料は 14 世紀になる。貞和５年（1349 年）11 月に勝尾寺の鳥居の造立に際して、三宅乾肥前左衛門入道が一貫文を負担している（史３）。

観応３年（1352 年）７月には河内国下仁和寺庄に対する三宅左衛門尉の押領を停止させる命令が出されている（史４）。しかし、９月にも濫妨の停止が訴えられており、命令は遵守されなかったようである（史６）。その間の８月には三宅出羽左衛門尉が芥川信貞等と実相院領摂津国新御位田領家職を濫妨している（史５）。

史４～６は同年の史料で、「左衛門尉」という官途名が共通するため、同一人物であろう。また、受領名として「出羽」を名乗っていることも注目される。戦国期に歴代の惣領が名乗る「出羽守」へつながるものかもしれない。

この他、垂水西牧での様子を『今西家文書』で窺うことができる（史７・10・11）。

明徳３年（1392 年）には相国寺の供養において、畠山満家の郎党として三宅四郎家村・三宅次郎慶明、細川頼元の郎党として三宅七郎氏村がみえる（史８）。戦国時代の三宅氏は摂津国を本拠とするが、河内守護畠山氏の郎党に姿がみえることや、史４・６において河内国の荘園を押領していること、また応永 16 年（1409 年）には近江国野洲郡

表１　三宅氏・三宅城関係一覧表（嘉応２年～永享３年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
1	嘉応２年 (1170年)	４月５日	『兵範記』	平信範が箕面寺に参詣した帰途、三宅助真のもとに寄る	「兵範記五・江記・平知信朝臣記」	
2	承安５年 (1175年)	３月30日	『勝尾寺文書』18 「検校法眼房政所下文」	慈徳寺領味舌庄の佃を助真が押妨することを停止する	『箕面市史』史料編一	
3	貞和５年 (1349年)	11月	『勝尾寺文書』66 「鳥居造立条々注文」	一貫文を三宅乾肥前左衛門入道が収める		
4	観応３年 (1352年)	７月27日	『妙心寺文書』	足利義詮、三宅左衛門尉が河内国下仁和寺庄を押領するのを停止させる	『大日本史料』 6-16	
5		８月24日	『実相院文書』	足利義詮、三宅出羽左衛門尉、芥川信貞等が実相院領摂津国新御位田領家職を濫妨するのを停止させる		
6		９月	『妙心寺文書』	足利義詮、三宅左衛門尉が河内国下仁和寺庄を押妨するのを停止させる	『大日本史料』 6-17	
7	貞治元年 (1362年)	－	『今西家文書』５ 「垂水西牧穂積名寄帳」	七郎名に「六条二リ十八ノ一反ミヤけ方」がみえる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
8	明徳３年 (1392年)	８月28日	『相国寺供養記』	畠山満家の郎党として三宅四郎家村・三宅次郎慶明、細川頼元の郎党として三宅七郎氏村がみえる	『群書類従』 第24輯　釈家部	
9	応永16年 (1409年)	９月26日	尊経閣文庫所蔵文書	近江国野洲郡の田畠について、三宅五郎左衛門尉家村が拝領したと称するが、永原正光に還付される	『大日本史料』 7-12	
10	正長元年 (1428年)	－	『今西家文書』 59「新大般若料田坪取納帳」	「三宅方」が「六条一リ卅三坪半・二リ三坪一反」に各一か所ずつみえる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
11	永享３年 (1431年)	８月		「三宅方」が御牧友忠名に「五条二リ廿三坪二反、七条二リ十七坪一反、七条二リ卅一坪一反九十歩、六条二リ廿七坪一反廿」、御牧時光名に「六条一リ卅二坪一反卅」、御牧源八名に「十一条七リ廿一ノ一反六十歩」、御牧助久名に「六条一リ廿六ノ一反」の計８か所みえる		

表２　三宅氏・三宅城関係一覧表（応仁元年～文明 17 年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
12	応仁元年(1467年)	５月	『応仁記』	東軍方の三宅、吹田、茨木、芥川等の諸侍が、能成寺を南へ向かい、平賀を攻める	『群書類従』第20輯　合戦部	上京の戦い
13		６月	『応仁記』・『応仁別記』	三宅は守護代秋庭備中守に恨みを持っていたため、西軍へ寝返り、大内軍は京へ上った		井鳥野の戦い（『応仁別記』は「猪取野」と表記)
14	文明元年(1469年)	６月16日	『経覚私要抄』	摂州国人36人守護に背き、大内に属す	『経覚私要抄』第８	
15		7月13日	『大乗院寺社雑事記』	摂州はほぼ大内方が攻めとる	『大乗院寺社雑事記』４	
16		12月16・24日	「野田弾正忠泰忠軍忠状」	東軍が16日に三宅館に到着し、数度合戦を行う。また24日には陣を構える	『大日本史料』8-1	
17	文明２年(1470年)	正月26日	「大内政弘感状」	仁保弘有が東軍に攻められた三宅城を守備したことに対する感状	『大日本古文書』家分け第14　三浦文書69	
18	文明10年(1478年)	８月６日	『大乗院寺社雑事記』	三宅城　細川政元に攻められる。援軍として河内から遊佐・誉田が派遣される。	『大乗院寺社雑事記』６	畠山義就方に属する
19		11月15日	『晴富宿禰記』	三宅城が細川政元に敵対しているのを、大和国人越智氏がやめるように説く	『晴富宿禰記』	
20	文明11年(1479年)	－	『今西家文書』33「御牧般若会名指出帳」	御牧助久名に「六条二リ廿六坪一反　ミやけ方」がみえる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
21		－	『今西家文書』35「御牧友忠名指出帳」	友忠名に「六条一リ廿三坪二反　三宅方、八条二リ卅一坪一反九十歩　三宅分金井分、六条二リ廿七坪一反廿歩　金井分三宅方」とみえる		
22		12月６日	『雑事要録』	沢良宜村の地下代官に三宅出羽守を任ずる	『吹田市史』第４巻	
23	文明13年(1481年)	１月ないし２月		水尾村　三宅が雁一を進上する	湯川2005	
24		12月25日	『賦引付』二	三宅窪が２貫文の返済について溝杭菊才丸に訴えられる	『室町幕府引付史料集成』下巻	
25	文明14年(1482年)	３月13日	『後法興院記』	三宅城が落城したと伝わる	『後法興院記』一	摂津国人一揆
26		11月12日	『実相院文書』	摂津吉志部村正木庄の年貢について三宅五郎左衛門尉に伝える	『大日本史料』第８編之14	
27	文明15年(1483年)	８月28日	『大乗院寺社雑事記』	河内十七箇所の千町鼻に城郭を築き、三宅・吹田・池田次郎が大将として守備する	『大乗院寺社雑事記』８	
28		９月９日		摂津州が千町鼻に陣を張る		
29	文明17年(1485年)	12月27日	『雑事要録』	摂州大番米処々　七貫文矢田分を三宅五郎左衛門が負担する	『吹田市史』第４巻	

の永原氏旧領を狙っており、活動範囲は摂津国内にとどまっていなかったようである（史９）。

３．応仁の乱～天文元年（1532 年）まで

応仁元年（1467 年）に勃発した応仁・文明の乱では、５月に摂津上郡の国人たちが京都での戦闘に東軍方で参加している（史 12)。しかし、６月に大内氏が大軍を率いて上洛した際、三宅氏は西軍へ寝返っている（史 13)。

文明元年（1469 年）６月 16 日には、摂津国人達が大内方（西軍）に寝返り、摂津は大内方が制圧する（史 14・15、註２)。12 月 16 ～ 24 日には東軍が西軍の「三宅館」を攻めている（史 16、註３)。文明２年の「大内政弘感状」では、「三宅城」が東軍に攻められたことが記されており、対を成すものであろう（史 17)。

文明 10 年（1478 年）８月６日に三宅城が細川勢に攻められるが、畠山義就勢が来援し（史 18)、11 月 15 日には大和国人の越智氏が三宅氏と細川政元との間を仲介している（史 19)。

文明 11 年（1479 年）閏９月に摂津国人一揆が起こり（註４)、文明 14 年（1482 年）３月に細川政元・畠山政長軍が摂津へ進軍し、三宅城は３月 17 日に攻め落とされている（史 25)。

本拠地である三宅城が落城しているが、垂水西牧（史 20・21・31 ～ 33)、正木庄（史 26)、近衛家領（水尾村（史 23・30・34)・沢良宜村（史 22)）などの荘園では活動が継続しており（註５)、摂津少郡代にも任じられている（史 35)。

文明 13 年（1481 年）には三宅窪らが、溝杭菊才丸に借銭のことで訴えられている（史 24)。

文明 15 年（1483 年）には畠山氏内部の争いに関わっており、河内十七箇所内の千町鼻の城の守備に、三宅・吹田・池田次郎が大将として入っている（史 27)。９月９日に同所に陣を張った摂津衆もこの三氏の軍勢であろう（史 28)。

明応元年（1492 年）以降も近衛家領水尾村の代官を務めている（史 36 ～ 41・43・44・48)。新免村・水尾村の代官であった三宅新三郎は、明応７年（1498 年）に殺人事件を起こして逐電し、三宅五郎左衛門が代官に任命されている（史 45、註６)。明応７年には新免村代官に任じられ(49)、東寺とも関係を持っていた（史 46・47・51)。明応９年（1500 年）には近衛家が三宅五郎左衛門に五百文を借りている（史 50)。

永正～大永年間（1504 年～ 1528 年）も近衛家領（史 52・54・59・60・66・67・83、註７）と垂水西牧に関与している（史 53・56・57・73 ～

表３　三宅氏・三宅城関係一覧表（長享元年～文亀２年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
30	長享元年(1487年)	1月ないし2月	『雑事要録』	水尾村　三宅三郎衛門が雁一を進上する	湯川2005	
31		－	『今西家文書』55「毎月御神供同供菜持足帳」	正末名に「三宅方」、為弘半名に「元二宮分三宅方・三宅方」、「西方小番廿番之事」に「三宅方」がそれぞれみえる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
32		－	『今西家文書』57「摂州所々取帳」	正末名、為弘半名、「高はい懸盤銭事」にそれぞれ「三宅方」がみえる		
33		－	『今西家文書』60「御神供米取納帳」	御牧友忠名の「六条一リ廿三ノ二反・七条二リ十七ノ一反・十一条五リ卅一ノ一反九十歩」、御牧時光名の「六条一リ卅二ノ一反卅」、御牧助久名の「七条一リ廿六ノ一反」に「三宅方」がみえる		
34	延徳2年(1490年)	1月ないし2月	『雑事要録』	水尾村　三宅三郎衛門が雁一を進上する	湯川2005	
35	延徳3年(1491年)	12月	『蓮成院記録』	細川政元、摂州少郡代として三宅五郎左衛門を任ずる	『多聞院日記』五	
36	延徳4年(1492年)	2月28日	『雑事要録』	水尾村　五郎右衛門死去したため、息子の新三郎を任料百疋で代官に任ずる	『吹田市史』第4巻	
37	明応元年(1492年)	1月ないし2月		水尾村　三宅三郎衛門が雁一を進上する	湯川2005	
38	明応2年(1493年)	1月ないし2月		水尾村　三宅新三郎が雁一を進上する		
39	明応3年(1494年)	1月ないし2月		水尾村　三宅が雁一を進上する		
40	明応4年(1495年)	1月ないし2月		水尾村　三宅新三郎が雁一を進上する		
41	明応5年(1496年)	1月ないし2月		水尾村　三宅新三郎が雁一を進上する		
42		4月21日	『東寺百合文書』わ函31「長盛奉書案」	薬師寺長盛が三宅五郎左衛門に堀人夫動員の督促を停止するとの細川政元の命を伝える	『大日本古文書』東寺文書8	
43	明応6年(1497年)	1月ないし2月	『雑事要録』	水尾村　三宅新三郎が雁一を進上する	湯川2005	
44	明応7年(1498年)	1月ないし2月		水尾村　三宅新三郎が雁一を進上する		
45		9月7日		水尾村　三宅新三郎が殺人事件を起こし逐電する 三宅五郎左衛門を任料二百疋で代官に任ずる	『吹田市史』第4巻	
46		10月9日	『東寺百合文書』し函174「摂津国榎坂村屋形下向要脚銭配符案」	三宅宗村が細川政元の下向費用を東寺領榎坂に課し、一貫文・十貫文を請けとる。	東寺百合文書WEB	
47		11月9日	『東寺百合文書』二函375「三宅宗村書状」	三宅五郎左衛門宗村から榎坂東寺への書状		ケ函304　11月29日付東寺領榎木殿宛て奉書あり
48	明応8年(1499年)	1月ないし2月	『雑事要録』	水尾村　三宅五郎左衛門が雁一を進上する	湯川2005	
49				新免村　御方料所の代官に三宅五郎左衛門を任ずる	『吹田市史』第四巻	
50	明応9年(1500年)	8月24日		三宅五郎左衛門に五百文を借りる		
51	文亀2年(1502年)	12月28日	『東寺百合文書』メ函275「三宅宗村要脚銭配符」	三宅宗村が差出人	東寺百合文書WEB	

75・78・80～82・85)。永正４年（1507年）に近衛家領本御位田と舎人名の代官に三宅修理亮が任命され（史61)、広橋家領沢良宜村の代官を三宅出羽守が務めている（史65)。

永正12年（1515年）には、三宅松夜叉が河上関に新関の設置を幕府に停止させられている（史76)。また、勧修寺家に仕える三宅氏もいたようである（史71・72・79)。

一方軍事面では、永正２年（1505年）に、畠山義英・尚順攻めに摂津上下郡衆が動員されている（史58)。以降の動員状況からみて、三宅氏も含まれていたと思われる。永正４年（1507年）の畠山義英攻めには摂津国衆として三宅秀村・伊丹元扶・池田貞正らが動員され（史62)、永正５年の池田貞正攻めでは、三宅・伊丹・河原林などの軍勢が池田城を攻め落としている（史63)。

また、細川澄元から摂津国人に発給された文書の宛先に「三宅出羽守」が見える（史64)。

永正８年（1511年）６月６日（註８)、三宅氏を含む摂津国人が細川高国方として、和泉国深井（堺市）で細川澄元方と戦い、敗北する（史68)。８月12日には、三宅城が開城したことが京都に伝わっており（史69)、下旬には、将軍足利義澄が近江から上洛するのに合わせて三宅出羽守らも上洛している（史70)。

永正17年（1520年）頃の「十念寺文書」には細川高国の近習として「三宅大和守宣村」が見える（史84、註９)。

大永６年（1526年）12月、三宅氏は細川高国方から阿波方（後の細川晴元方）へ寝返り、吹田に陣を構える（史86)。大永７年（1527年）２月に、細川高国方の複数の城が落城するが、その中に「三宅城」が認められる（史87、註10)。

天文元年（1532年）には法華衆を主体とする京衆と本願寺の戦いが起こる。「津国衆」は当初本願寺方であったようだが、後に寝返って富田道

表４　三宅氏・三宅城関係一覧表（永正元年～大永６年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
52	永正元年 (1504年)	１月ないし ２月	『雑事要録』	水尾村　三宅新三郎が雁一を進上する	湯川2005	
53	永正２年 (1505年)	正月20日	『今西家文書』64 「毎月御供帳」	三宅方　右衛門田（正末名・京成名・寿福院名）、三宅方　津田（近則名・清重名・為弘名）がみえる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
54		１月ないし ２月	『雑事要録』	水尾村　三宅新三郎が雁一を進上する	湯川2005	
55		２月16日		新免村代官の三宅新三郎に扇を遣わす	『吹田市史』第４巻	
56		６月	『今西家文書』 65「南郷五ケ村段銭帳」	榎木方「四貫三百四十三文　三宅殿弁」、新方「三百廿九文　三宅方弁」、奥方「福寿名分三宅方へ立用　貳貫百廿九文、二番分四貫二百五十文　三宅方立用也」、今堀方「貳貫四十七文　三宅方立用也」、北延吉半名「二百卅三文」。また、三宅五郎左衛門殿に合拾四貫九百五十二文の段銭がかけられる。	『春日大社南郷目代今西家文書』	
57		―	『今西家文書』 66「南郷五ケ村段銭帳」	舎人正光半名「三宅方へ立用　二貫四十七文」、東寺「内藤方分ニ三宅方弁」、則武番「三宅方為弘半名」、恒貞番「二百文　内藤方分三宅方弁」		
58		―	『不問物語』 「上９　畠山両家暫時和睦之事」	細川政元による畠山義英・畠山尚順攻めに摂津の諸侍が動員される	和田1983	
59	永正３年 (1506年)	正月28日	『後法成寺関白記』	三宅新三郎が近衛尚通に鴈一を進上する	『後法成寺関白記』一	
60	永正４年 (1507年)	９月13日		三宅新三郎が近衛尚通に魚物を進上する		
61		９月17日		本御位田幷舎人名両所の代官として三宅修理亮を任命する		
62		12月	『瓦林政頼記』	細川澄元による畠山義英攻めに摂津国衆として三宅出羽守秀村、伊丹兵庫助元扶、池田筑後守貞正らが動員される	『続群書類従』第20輯上　合戦部	
			『不問物語』上20 「畠山上総介義英退治事」		和田1983	
63	永正５年 (1508年)	５月	『不問物語』下５ 「池田筑後守退治之事」	細川高国による池田筑後守貞正攻めに際し、三宅・伊丹・河原林などが動員される		
64		８月10日	『知新集』	細川澄元発給の摂津国人宛て文書に、「三宅出羽守」がみえる	『新修広島市史』第６巻	
65		９月14日	『守光公記』	沢良宜村代官三宅出羽守より請文が届く	『守光公記』一	
66	永正６年 (1509年)	正月22日	『後法成寺関白記』	三宅新三郎が近衛尚通に鴈一を進上する	『後法成寺関白記』一	
67	永正７年 (1510年)	正月４日		三宅新三郎が近衛尚通に鴈一を進上する 扇を遣わす		
68	永正８年 (1511年)	６月６日	『瓦林政頼記』	摂州上下郡の池田・伊丹・三宅・茨木・安威・福井・太田・入江・高槻等をはじめとする細川高国方が二万人余を率い、細川澄元方と和泉国深井で合戦を行うが、敗北する	『続群書類従』第20輯上　合戦部	
		７月13日	『不問物語』下14 「泉州深井合戦事」		和田1983	
69		８月12日	『後法成寺関白記』	今朝、三宅城が開城し、退陣したとの知らせが届く	『後法成寺関白記』一	
70		８月	『瓦林政頼記』	将軍足利義澄が近江より上洛するのに合わせて三宅出羽守らも上洛する	『続群書類従』第20輯上　合戦部	
		８月下旬	『不問物語』下17 「自江州御敵出張事」		和田1983	
71	永正９年 (1512年)	６月６日	『守光公記』	備前国鳥取へ三宅八郎を遣わす	『守光公記』一	
72	永正10年 (1513年)	７月13日		勧修寺尚顕が三宅を使者として広橋守光に遣わす		
73	永正12年 (1515年)	正月吉日	『今西家文書』70 「御神供米銭毎月取納帳」	三宅方として、黒田孫左衛門方・津田方がみえる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
74		正月	『今西家文書』84 「御神供米銭毎月納帳」	三宅五郎左衛門尉方として、正末・京成・為弘・極楽寺・福寿・小月・近則・重光・清重の各名がみえる		
75		10月	『今西家文書』73 「御神供納帳」	潤10月30日分「五貫文」が三宅方とされる		
76		10月25日	『今西家文書』208 「室町幕府奉行人連署奉書案」	三宅松夜叉が河上関に新関を設置しようとするのを停止する		
77	永正12年頃 (1515年頃)	―	『春夢草』	「摂州三宅称願寺梵阿張行会」で読んだ句がある	『続群書類従』第36輯　拾遺部	
78	永正13年 (1516年)	11月	『今西家文書』71 「御神供納帳」	11月10日分「二石一斗八合四勺」と「三貫文」が三宅方とされる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
79	永正14年 (1517年)	10月25日	『守光公記』	勧修寺尚顕が三宅を使者として広橋守光に遣わす	『守光公記』二	
80	永正15年 (1518年)	12月	『今西家文書』74 「御神供米銭帳」	12月24日分「六貫文」が三宅方とされる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
81	永正16年 (1519年)	―	『今西家文書』80 「御供運上帳」	「四石五斗二升六合」「六貫五百七十七文」が三宅方とされる		
82	永正17年 (1520年)	11月	『今西家文書』76 「御神供納帳」	11月29日分「四石七斗八升」が三宅方とされる		
83		５月13日	『後法成寺関白記』	三宅新三郎が近衛尚通に両種一荷を進上する	『後法成寺関白記』二	
84	永正17年頃 (1520年)	―	「十念寺文書」	細川高国の近習に三宅大和守宣村がみえる	馬部2018a	
85	大永４年 (1524年)	―	『今西家文書』85 「目代方領家御指出帳」	「七条一リ八ノ坪」に「三宅方」がみえる	『春日大社南郷目代今西家文書』	
86	大永６年 (1526年)	12月	『細川両家記』	三宅須田、高国方から阿波方（後の細川晴元方）に寝返る	『群書類従』第20輯　合戦部	
			『足利季世記』 「香西四郎左衛門尉讒死之事」	三宅吹田、高国方から寝返り、吹田に陣を張る。12日に高国方が吹田を攻め、三宅吹田は敗北する	『改訂　史籍集覧』第13冊	

表５　三宅氏・三宅城関係一覧表（大永７年～天文５年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
87	大永７年 (1527年)	２月４日	『細川両家記』	細川高国方の摂津国上郡の諸城（芥川・太田・茨木・安威・福井・三宅）が落城する	『群書類従』 第20輯　合戦部	
		２月	『足利季世記』 「桂合戦の事」		『改訂　史籍集覧』 第13冊	
88	天文元年 (1532年)	９月28日	『私心記』 (東大本・堺本)	京衆が山崎へ侵攻したが、「津国衆・一揆衆・国衆」が計略によって京衆を破る	『大系　真宗史料』 文書記録編10	
89		11月23・24日	『私心記』 (堺本)	23日、津国見物、所々焼けている 24日、雑説として津国衆皆寝返り、富田も焼ける		
90		11月23日	『足利季世記』 「所々一揆起ル事」	摂津上郡の武士衆が団結して、富田道場などを焼き討ちする	『改訂　史籍集覧』 第13冊	
		12月22日	『細川両家記』		『群書類従』 第20輯　合戦部	
91	天文２年 (1533年)	３月18日	330『霊松寺文書』 「三宅国村禁制案」	三宅国村、摂津上郡霊松寺に禁制を出す	『高槻市史』第３巻	
92	天文３年 (1534年)	閏正月11日	『私心記』 (東大本・堺本)	三宅、門徒になる	『大系　真宗史料』 文書記録編10	
93		６月19日	細川晴国書状写	細川晴国から畠山稙長宛て書状に使者として三宅出羽守がみえる	岡田2012	
94		７月28日	『私心記』 (東大本・堺本)	三宅称願寺が本願寺を訪れる	『大系　真宗史料』 文書記録編10	
95		９月11日	『勝尾寺文書』1173 「細川晴国書状」	細川晴国、三宅国村を通じて勝尾寺に祈祷巻数の礼を述べる	『箕面市史』 史料編二	
96		10月11日	『今西家文書』214 「三宅国村書状」	三宅国村、春日社神供米の納入について南郷目代に伝える	『春日大社南郷目代今西家文書』	
97		11月９日	『今西家文書』215 「称願寺珍梵書状」	称願寺珍梵、三宅国村の命により、春日社神供米を納めるように南郷五ケ村の給人に伝える		
98	天文４年 (1535年)	６月29日	『私心記』 (東大本)	三宅出羽・称願寺が来訪する	『大系　真宗史料』 文書記録編10	
99		９月11日	『私心記』 (東大本・堺本)	興正寺蓮秀、子息を三宅へ人質として送る		
100	天文５年 (1536年)	正月22日	『天文日記』	本願寺、細川晴国・三宅・称願寺へ年頭祝儀の樽・書状を贈る	『大系　真宗史料』 文書記録編８	
101		正月24日		三宅への使者が本願寺への返状を持ち帰る。使者は三宅処において三献で迎えられた		
102		４月17・18日		三宅称願寺へ宇治粽を三籠遣わす 翌日（18日）返事あり		
103		５月24日		称願寺より、薬師寺備前に同意した武士が本願寺に出入りするのを停止するように申し入れがある		
104		７月11日		三宅および称願寺から音信が無いため、絞手綱、腹帯などを贈る 同日、三宅・称願寺から返事を持って使者が帰る		
105		７月17日		三宅出羽守・称願寺より、以前樽を贈ったことについての返礼の使者が来る		
106		８月３日		三宅出羽守が中島に出陣することについて三種五荷、称願寺にも三種三荷を遣わす		
107		８月28日	『厳助大僧正記』	細川八郎（晴国）、天王寺で自害	『続群書類従』 第30輯上　雑部	
		８月29日	『細川両家記』	三宅国村、細川晴国兄弟を天王寺で切腹させる	『群書類従』 第20輯上　合戦部	
			『足利季世記』 「細川晴国最後ノ事」		『改訂　史籍集覧』 第13冊	
		９月５日	『天文日記』	細川晴総（晴国）の事、珍重	『大系　真宗史料』 文書記録編８	
108		９月７日		三宅、太刀廿振りを所望する。五合二十振を遣わす		
109		10月３日	『御内書幷私状等案』	細川元常宛ての書状で、溝杭村の大館家知行分を三宅が押領していたが、この度三宅が細川晴元に帰参するため、押領を停止させることを要請する	『大館記』四 馬部2018ｂ史料９	
110		10月６日	『後法成寺関白記』	三宅出羽守が太刀を持参したので盃を与えた	『後法成寺関白記』 四	
111		11月４日	『鹿苑日録』	将軍・管領の下知により補任状が出れば、三宅は戸伏の年貢を出すと言っている	『鹿苑日録』一	
112		11月18日	『天文日記』	堺在陣中の三宅方へ三種五荷を遣わす	『大系　真宗史料』 文書記録編８	
113		11月23日		和泉より使者が三宅からの返事を持ち帰る		
114		－	「仏涅槃図」	蓮花寺仏涅槃図の修復に三宅出羽守国村・三宅遠江守永清らが関与する	『新修茨木市史』 第９巻　美術工芸	

場などを焼き討ちしている。（史 88 ～ 90）。

４.三宅国村の時代（天文２年～天文 17 年）

天文２年（1533 年）以降、三宅国村の活動が確認される。その多くは、天文４年（1535 年）～ 16 年（1547 年）にかけて本願寺門主の証如との間に行われた贈答記事である。本節では史料中の「三宅出羽守」を「国村」と記す。

天文２年（1533 年）３月 18 日に霊松寺（高槻市）に禁制を出している（史 91）。国村の確認できる初例である。

天文３年（1534 年）閏正月 11 日に、国村は本願寺の門徒となる（史 92）。これ以降、本願寺との間で贈答が頻繁に行われる。また天文３年（1534 年）～５年（1536 年）には三宅所在の時宗寺院、称願寺の記述も確認できる（註 11）。６月 19 日に細川晴国の使者を国村が務め（史 93）、７月 28 日に称願寺が本願寺を訪問する（史 94）。９月 11

日に細川晴国が国村を通じて勝尾寺に祈祷巻数の礼を伝える（史 95）。10 月 11 日に国村が南郷目代に春日社神供米の納入について伝え（史 96）、11 月 9 日に改めて称願寺珍梵を通じて南郷五ケ村の給人に納入するよう命じている（史 97）。

天文４年（1535 年）６月 29 日に国村と称願寺が本願寺を訪問する（史 98）。９月 11 日に興正寺蓮秀（蓮如の曽孫）の子息が人質として三宅へ送られてくる。この人質は三宅氏経由で細川氏へ送られたと考えられている（史 99・馬部 2018c）。

天文５年（1536 年）の贈答は、本願寺と三宅氏間のみならず、本願寺と称願寺間でも頻繁に行われている（史 100 ～ 102・104 ～ 106）。５月 24 日に称願寺から本願寺へ、薬師寺備前に同意した武士の出入りを停止するように申し入れがなされる（史 103）。８月３日には国村が中島へ出陣し（史 106）、29 日に擁立していた細川晴国を天王寺で、自害させている（史 107、註 12）。

国村が細川晴元に帰参することを契機に、国村が押領していた溝杭村の問題を、大館常興が解決しようする（史 109・馬部 2018b）。一連の文書と考えられるものが『大館常興日記』の紙背文書に認められる（史 119・127）。解決には時間がかかったようだが、天文 10 年（1541 年）には代官三宅氏が年貢を運んでおり、ある程度の解決を見ていたようである（史 140・142）。一連の書簡中に国村の子息である「三宅千世寿」の名が認められる（史 127）。10 月６日に近衛尚道に太刀を献上している（史 110）。11 月４日に戸伏荘の年貢についての記述がある（史 111、註 13）。11 月頃に国村は堺に出陣している（史 112・113）。

更に注目される史料として、蓮花寺の仏涅槃図を鐘楼坊弘賢の勧進で三宅国村・永清らが修復を行っている（史 114、註 14）。

天文６年（1537 年）１月に本願寺との間で互いに年始の祝儀を行う（史 115・116）。３月３日の勧修寺殿宛ての書状に「三宅方」とみえる（史 117、註 15）。７月７日に下長左衛門大夫が越中へ下向するに際して、証如に書状の発行を依頼するが断られている（史 118）。12 月 26 日に本願寺から国村へ細川晴元との講和を斡旋したことへの礼状と銭 50 貫文が贈られる（史 120）。

天文７年（1538 年）５月１日に三宅三郎左衛門の子が大坂本願寺の膝元である森の宮で勧進猿楽を奉納する（史 121）。６月・12 月に本願寺とのやりとりが確認できる（史 122・123、註 16）。

天文８年（1539 年）２月・３月に本願寺との贈答が確認できる（史 124・125、註 17）。

閏６月 13 日に将軍足利義晴が三好孫次郎（長慶）へ意見するように池田筑後守、伊丹親興、国村、芥川豊後守に命じている（史 126）。

天文９年（1540 年）正月・３月・６月に本願寺との贈答が確認でき（史 128・129・131）、５月４日に「先日の喧嘩」が無事に収まったことを知らせる使者が本願寺に来る。三宅氏周辺で何らかの諍いがあったものと思われる（史 130）。

７月７日に淀の藤岡与三の跡職が国村に預けられ、石清水門跡が幕府に訴訟を起こす（史 132）。

天文 10 年（1541 年）３月・８月・10 月・12 月に本願寺との贈答が確認できる（史 134 ～ 136・139・145）。また、２月 24 日に将軍足利義晴から白傘袋と毛氈鞍覆を許される（史 133）。これは、国村が畿内の有力武士として認識されていた証左といえようか（註 18）。

９月に塩川氏が一蔵城（山下城・川西市）に籠城したため、縁者である伊丹親興と国村が相談し、木沢長政を頼る（史 137）。10 月１日に国村、木沢長政、伊丹親興が三好神五郎（宗三）の身上についての書状を提出し、足利義晴が３日に細川晴元へ相談している（史 138）。

10 月 23 日に溝杭荘の年貢について大館常興が代官の三宅に催促する（史 140）。この年貢は、11 月 16 日に八幡まで運んだが、道が悪いため留まっていることが伝えられる（史 142、註 19）。

『多門院日記』11 月 26 日条に「三宅氏が先日細川晴元に降参した」と記される（史 143）。『細川両家記』では、11 月に国村が細川晴元に降参する噂が流れ（史 141）、12 月に国村が噂通り晴元に帰参したことが記される（史 144）。

天文 11 年（1542 年）２月に本願寺との贈答が確認できる（史 146・147）。３月 28 日に足利義晴父子が京都へ戻る際に国村は細川晴元に従う（史 148）。閏３月８日には、前年に許された白傘袋と毛氈鞍覆の礼として、大館常興に太刀、将軍足利義晴に馬と太刀を献上している（史 149）。

天文 12 年（1543 年）この年は本願寺との贈答のみ確認できる（史 150 ～ 152）。

天文 14 年（1545 年）５月 24 日に細川晴元が

表６　三宅氏・三宅城関係一覧表（天正６年～天正 10 年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
115	天文６年(1537年)	1月19日	『天文日記』	三宅出羽守から本願寺へ年始の祝儀が届く。	『大系　真宗史料』文書記録編８	
116		1月22・23日		三宅出羽守へ　年始の祝儀と先日の返礼を遣わす翌日（23日）返礼あり		『証如書札案』14に書面あり
117		３月３日	『証如書札案』19	勧修寺殿宛ての書状に「猶三宅方可被申候」とある	『大系　真宗史料』文書記録編４	
118		７月７日	『天文日記』	三宅出羽守が、下長左衛門大夫が越中へ下向する際に証如の書状を所望するが断る。	『大系　真宗史料』文書記録編８	
119		10月頃	『大館常興日記』紙背文書	溝杭村の押領についての細川晴広から宮内卿局への書状	『大館常興日記』三馬部2018ｂ史料10	天文５年10月３日と関連
120		12月27～29日	『天文日記』	本願寺と細川晴元との講和を斡旋した三宅出羽守へ50貫文を贈る。翌日（28日）使者帰る。また、29日に返信の書状が届く。	『大系　真宗史料』文書記録編８	『証如書札案』146に12月26日付の書面あり
121	天文７年(1538年)	５月１・10日		三宅三郎左衛門の子、５月１日に森の宮でにおいて勧進猿楽を務める		
122		６月17・18日		三宅出羽守、本願寺の来訪が延引しているため、使者を遣わす。三宅へ返事を出す		『証如書札案』44に６月18日付の書面あり
123		12月２・６日		２日に三宅主計入道より三種三荷が届く。６日に三種五荷を返礼として遣わす		
124	天文８年(1539年)	２月23日		三宅出羽守より年頭の祝儀が届く。三宅孫左衛門が馬代、太刀を持参する。三宅へ返事を出す。		『証如書札案』23に２月23日付の書面あり
125		３月１日		三宅へ返礼として、手簡一腰、馬代、三種三荷を遣わす		『証如書札案』29に２月28日付の書面あり
126		閏６月13日	『親俊日記』	将軍足利義晴が三好孫次郎（長慶）へ意見するように池田筑後守、伊丹次郎、三宅出羽守、芥川豊後守に命じる	『親俊日記』一	
		閏６月14日	『大館常興日記』		『大館常興日記』一	
127	天文９年(1540年)	10月頃	『大館常興日記』紙背文書	溝杭村の押領問題についての書簡３通 三宅国村の子息である「三宅千世寿」がみえる	『大館常興日記』三馬部2018b史料12・13・14	
128		正月14日	『天文日記』	三宅出羽守より年頭の祝儀として一腰、馬代と書状が届く。返礼を遣わす。	『大系　真宗史料』文書記録編８	『証如書札案』８に正月14日付の書面あり
129		３月26・27日		三宅へ年始の返礼として、一腰、馬代、三種三荷を遣わす。27日に使者帰る		『証如書札案』56に３月20日付の書面あり
130		５月４日		三宅より、先日の喧嘩が無事に収まったことを知らせる使者が来る		
131		６月29日		三宅出羽守へ音信と瓶十桶を遣わす	『大系　真宗史料』文書記録編８	
132		７月７日	『大館常興日記』	淀の藤岡与三の跡職が細川晴元から三宅に預け置かれたことに石清水門跡が幕府に訴訟を起こす	『大館常興日記』二	
133	天文10年(1541年)	２月24日	『大館常興日記』	三宅出羽守、毛氈鞍覆いと白笠袋の使用を許される	『大館常興日記』二	
134		３月25日	『天文日記』	三宅出羽へ当年の祝儀として書札、三種三荷を遣わす	『大系　真宗史料』文書記録編８	『証如書札案』36に３月22日付の書面あり
135		３月27日		先日の返事として、一腰と書状が届く。返事を遣わす。		『証如書札案』39に３月27日付の書面あり
136		８月朔日		三宅出羽より音信あり。一礼、一腰、馬一疋が届く。		
137		９月	『細川両家記』	塩川伯耆守が一蔵城（山下城）に籠城したので、縁者である伊丹次郎親興と三宅出羽守が相談し、木沢長政を頼る	『群書類従』第20輯上　合戦部	
			『足利季世記』「一蔵之城攻事」		『改訂　史籍集覧』第13冊	
138		10月１・３日	『大館常興日記』	三好神五郎（宗三）の身上について三宅出羽守、木沢左京亮、伊丹次郎が書状を提出する	『大館常興日記』二	
139		10月15・18日	『天文日記』	三宅出羽へ三種三荷を遣わす。18日に返事が届く	『大系　真宗史料』文書記録編８	
140		10月23日	『大館常興日記』	溝杭荘の年貢について代官三宅に催促する	『大館常興日記』二	
141		11月	『細川両家記』	三宅出羽守が細川晴元へ帰参する噂が流れる	群書類従』第20輯上　合戦部	
142		11月16日	『大館常興日記』	溝杭荘年貢米を八幡まで運ぶが路次が悪いため滞留することを代官三宅が伝える	『大館常興日記』二	
143		11月26日	『多聞院日記』	摂州三宅、先日細川晴元へ降参した	『多聞院日記』一	
144		12月	『細川両家記』	三宅出羽守がかねての噂通りに細川晴元へ帰参する	群書類従』第20輯上　合戦部	
145		12月６・７日	『天文日記』	三宅出羽へ、八朔の返礼として、一札、太刀、梅染弐端、綿十把を遣わす	『大系　真宗史料』文書記録編８	『証如書札案』85に12月５日付の書面あり

南山城へ出兵した際に、三宅氏は 500 の兵を率いている。摂津国人では、池田氏が 1500、伊丹氏が 300、塩川氏が 100 を率いており、三宅氏の兵力は池田氏には劣るが、伊丹氏より多く、その勢力の大きさを窺うことができようか（史 153）。

天文 15 年（1546 年）９月３日、国村・池田筑後守などは、河内の遊佐長教が擁立した細川氏綱に味方する（史 154）。９月４～ 22 日の『私心記』、９月 19 日の『多聞院日記』には摂津国内で合戦が行われたことが記される（史 155・156）。史 154 の結果、細川氏綱と細川晴元との争いが激化したものと思われる。

10 月 15 日付の細川氏綱から国村宛ての文書が残る（史 157）。また、11 月５日に本願寺に国村から蜜柑２籠が贈られている（史 158）。

天文 16 年（1547 年）正月に宝筐院領木工荘（高槻市）の５年間の代官職を請け負う（史 159）。しかし、三宅城が細川晴元の軍勢に攻められる。（史 160 ～ 172）。

『細川両家記』に記される経緯は以下の通りで

表７　三宅氏・三宅城関係一覧表（天文 11 年～天文 17 年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
146	天文11年(1542年)	２月９日	『天文日記』	三宅出羽守より春の祝儀として、一章、一腰、馬代が届く	『大系　真宗史料』文書記録編９	
147		２月10・11日		三宅へ祝儀として三種三荷を遣わす。翌日（11日）返礼が届く		
148		３月28日	『言継卿記』	足利義晴・義輝が京都へ戻る際に、波多野・長塩・三宅が騎馬で細川晴元に従う	『言継卿記』１	
149		閏３月８日	『大館常興日記』	三宅出羽守より毛氈鞍覆いの使用を許された礼として太刀一腰が贈られる 将軍へは馬・太刀三千疋を献上する	『大館常興日記』三	
150	天文12年(1543年)	２月１日	『天文日記』	三宅出羽守より年始の礼のため使者が来る	『大系　真宗史料』文書記録編９	
151		２月15日		三宅より証如の男子が誕生について音信がある		
152		11月25日		三宅出羽守より蜜柑三籠が届く		
153	天文14年(1545年)	５月24日	『言継卿記』	細川晴元が、南山城に出兵した際に、三宅氏は500の兵を率いる	『言継卿記』二	
154	天文15年(1546年)	９月３日	『細川両家記』	三宅出羽守、池田筑後守など摂津国人は遊佐長教の擁立した細川氏綱に味方する	『群書類従』第20輯上　合戦部	
155		９月４～22日	『私心記』（堺本・本願寺本）	摂津国内（中嶋・国嶋・池田・芥川など）で合戦が行われる	『大系　真宗史料』文書記録編10	
156		９月19日	『多聞院日記』	昨日、摂州において大合戦があり、大勢が討ち死にした	『多聞院日記』一	
157		10月15日	75「細川氏綱書状」	細川氏綱発給の三宅国村宛文書	『東京国立博物館図版目録』中世古文書編	
158		11月５日	『天文日記』	三宅出羽守より蜜柑弐籠が届く	『大系　真宗史料』文書記録編９	
159	天文16年(1547年)	正月	『天龍寺文書』	天龍寺塔頭宝篋院領木工荘の代官職を請け負う	原田編2011	
160		２月25日	『細川両家記』	細川晴元の軍勢が三宅城を包囲する	『群書類従』第20輯上　合戦部	
161		2月27日	『私心記』（本願寺本）	三宅城が攻められていることが伝わる	『大系　真宗史料』文書記録編10	
162		３月３日	『長享年後畿内兵乱記』	三宅城が落城する	『群書類従』第20輯上　合戦部	
163		３月８日	『天文日記』	三宅城を攻めるため、茨木に在陣する細川晴元へ樽を遣わす	『大系　真宗史料』文書記録編９	
164		３月９日	『私心記』（堺本・本願寺本）	三宅城が河内衆に攻められる	『大系　真宗史料』文書記録編10	
165		３月10日	『天文日記』	籠城する三宅出羽守へ書状と樽を贈ったが、入城できなかった	『大系　真宗史料』文書記録編９	
166		３月13日		三宅城を攻める在陣衆へ樽を贈る		
167		３月15日	『私心記』（堺本）	三宅城が焼ける	『大系　真宗史料』文書記録編10	
168			『細川両家記』	三宅城の外城が攻め落とされる	『群書類従』第20輯上　合戦部	
169		３月22日		城内より詫言して本城も明渡す		
170			『私心記』（堺本・本願寺本）	攻め手は三宅城より河内十七ケ所へ退く	『大系　真宗史料』文書記録編10	
171		３月24日	『天文日記』	細川晴元へ三宅城が開城について書状・樽を贈る また、退城した三宅出羽守へも樽を贈る	『大系　真宗史料』文書記録編９	
172		４月頃	『享禄天文之記』	畠山政国・細川晴元が茨木城に入り、細川氏之が三宅城を攻める	奈良女子大学1991	
173	天文17年(1548年)	10月28日	『細川両家記』	三宅出羽守等、細川氏綱を擁立した三好長慶へ味方する	『群書類従』第20輯上　合戦部	

ある。２月 25 日に細川晴元の軍勢が三宅城を包囲する（史 160）。３月 15 日に「外城責落さるる也」とある（史 168）ので、三宅城は内外二重構造になっていた可能性がある。３月 22 日に「本城」も明け渡している（史 169）。

『天文日記』、『私心記』では、２月 27 日に三宅城が攻められていることが伝わる（史 161）。証如は攻め手の細川軍と守り手の国村の双方に贈り物をしており（史 163・165・166）、三宅城開城後にも双方に礼をつくしている（史 171）。この戦いでの本願寺は中立の立場を取らざるを得なかったのだろう。３月９日に三宅城が河内衆に攻められ（史 164）、３月 15 日に三宅城が焼ける（史 167）。この日付は先述した『細川両家記』での「外城責落」された日と一致する。

３月 22 日には攻め手が河内十七ケ所へ退く（史 170）。この日付は『細川両家記』で「本城」を明け渡した日と一致し、三宅城の攻防戦が事実上終了したことを示しているのであろう（註 20）。

『享禄天文之記』では、細川氏綱方との戦いに際して、畠山政国・細川晴元が茨木城に入り、細川持隆が三宅城を攻める。この時、三宅城から 10 町と、それより東西 50 町に小屋をかけ、畠山在氏が小屋の辺りに在陣するとしている（史 172、註 21）。

天文 17 年（1548 年）　10 月 28 日、国村などが細川氏綱を擁した三好長慶へ味方する（173）。

５．江口合戦とそれ以降

天文 18 年（1549 年）は、江口合戦の起こった

表８　三宅氏・三宅城関係一覧表（天文 18 年～永禄５年）

番号	年号	月日	文書名	内容	出典	備考
174	天文18年(1549年)	5月2日	『細川両家記』	香西與四郎、三宅城から西河原へ出陣し、芥川・三好長逸と合戦し、敗北する	『群書類従』第20輯上　合戦部	
			『足利季世記』「川原合戦ノ事」		『改訂　史籍集覧』第13冊	
175		5月5日	『細川両家記』	三好宗三　三宅城へ入城する	『群書類従』第20輯上　合戦部	
			『足利季世記』「幡雲立事」		『改訂　史籍集覧』第13冊	
176		5月28日	『細川両家記』	細川晴元　多田一蔵から三宅城へ入る	『群書類従』第20輯上　合戦部	
			『足利季世記』「幡雲立事」		『改訂　史籍集覧』第13冊	
177		6月11日	『足利季世記』「宗三出張ノ事」	三好宗三　三宅城から中嶋江口へ出陣する。十河一存・安宅冬康が三宅城と江口の連絡を絶つために別府川に陣を敷く		
		6月17日	『細川両家記』		『群書類従』第20輯上　合戦部	
178		6月24日	『足利季世記』「江口城攻落シ宗三打死ノ事」	十河一存,三宅城を攻めるように進言する。明け方に三宅城を攻め、二の木戸まで侵入するが攻略を諦める	『改訂　史籍集覧』第13冊	
179			『細川両家記』	細川晴元　三宅城から丹波を経由して近江坂本へ落ちる	『群書類従』第20輯上　合戦部	
			『足利季世記』「大樹ト晴元御没落ノ事」		『改訂　史籍集覧』第13冊	
180			『私心記』（東大本・堺本）	江口で三好宗三・高畠ら討ち死にする夕刻、細川晴元、三宅城から落ちる	『大系　真宗史料』文書記録編10	
181			『天文間日次記』	晴元は三宅にいるというが、小坂へ落ちたともいう	稲城2005・田中2019	
182		6月27日	『天文日記』	江口が落城したことについて諸将に音信・祝儀を遣わす	『大系　真宗史料』文書記録編９	
183		7月	『厳助大僧正記』	細川晴元、三宅より落ちる	『続群書類従』第30輯上　雑部	
184	天文20年(1551年)	12月22日	『証如上人書札案』	三宅三良右衛門・三宅新右衛門宛書状	『石山本願寺日記』下	『大系真宗史料』には掲載なし
185	永禄４年(1561年)	3月3日	『永禄四年三好亭御成記』	将軍足利義輝の三好義興邸御成りの際に、伊丹・三宅に警固（辻竪）を申し付ける	『続群書類従』第23輯下　武家部	
			『三好筑前守義長朝臣亭江御成之記』		『群書類従』第22輯　武家部	
186	永禄４年前後(1561年)	6月23日	『勝尾寺文書』1161「三宅能家書状案」	三宅豊前守能家が高山名主百姓中に勝尾寺領高山荘の地頭職について沙汰を出す	『箕面市史』史料編二	
187	永禄５年(1562年)	5月20日	『細川両家記』	三宅出羽守、畠山方に味方し、豊嶋郡で放火する。しかし、畠山方が敗北したため、城を明け渡し、浪人となる	『群書類従』第20輯上　合戦部	
			『足利季世記』「教興寺合戦之事」		『改訂　史籍集覧』第13冊	出羽守国村とする
188	元亀元年(1570年)	9月2日	『言継卿記』	足利義昭が三好三人衆方の香西・三宅を討伐するために摂津へ出陣する	『言継卿記』４	

年である。三宅城は一昨年の開城により、細川晴元の勢力下にあり、香西與四郎が城主であった。

江口合戦の推移の内、三宅城と関わる部分は、『細川両家記』・『足利季世記』では以下のように記される（註 22）。５月２日に香西與四郎が三宅城から総持寺辺の西河原で、三好長逸らと戦い敗北する（史 174）。５月５日に三好宗三が三宅城へ入る（史 175）。５月 26 日に細川晴元が多田一蔵から三宅城に入る（史 176）。６月 17 日に三好宗三が中嶋江口へ出陣するが、晴元は三宅城に留まっている。一方、三宅城と江口との連絡を絶つため、十河一存・安宅冬康が別府川に陣を張る（史 177）。６月 24 日の明け方に十河一存が三宅城を攻める（史 178）。江口での合戦で三好宗三らが討ち死にし、晴元は三宅城から脱出して近江へ落ちる（史 179）。一方一次史料で確認できるのは、江口で三好宗三らが討ち死にし、細川晴元が三宅城から落ちのびたことのみである（史 180 ～ 183、註 23）。

この戦いにおける三宅氏の動静は確認できない。あくまで推測ではあるが、本拠地の三宅城を細川晴元方に占領されている状態であったこと、前年に三好長慶方についていることから、三好長慶に属して戦ったのではないだろうか。

永禄４年（1561 年）３月３日に足利義輝が三好義長（三好長慶の子・後の義興）邸への御成を行う。その際に警固として三宅氏が伊丹氏と並んで見える（史 185）。ただし、この三宅氏が国村であるかどうかは、天文 17 年（1548 年）から 13 年が経過しており、その間の活動が確認できないことから判断できない。187 に見える「三宅出羽守」についても同様である。永禄４年頃に比定されている 186 では、「三宅能家」が確認できる。

永禄５年（1562 年）には三好長慶方と畠山高政・根来寺連合軍との間で行われた久米田の戦い（岸和田市）から教興寺の合戦（八尾市）に至る一連の争乱に際して、「三宅出羽守（註 24）」は畠山方につき、5 月 20 日に豊嶋郡に放火する。しかし、畠山方が敗北したために城を明け渡して浪人となった（史 187）。明け渡した城が三宅城であれば、

これが現時点で最後の記述となる。

元亀元年（1579 年）に足利義昭が三好三人衆方の香西・三宅を討伐するため摂津へ出陣する(188)。これが三宅氏の最後の動向である。

６．まとめ

前節までに三宅氏および三宅城に関する記述を追ってきた（註 25)。三宅氏は毛氈鞍覆・白傘袋を許されるなど摂津を代表する国人として扱われ、本拠地の島下郡のみならず、豊嶋郡でも代官を務めるなどその活動が確認できた。しかし、元亀元年(1570 年)を最後にその姿は見えなくなる。

本拠地の三宅城は、茨木市内では、茨木城（一時期守護所であったとも目される）と並ぶ重要な拠点であったと考えられ、特に淀川下流域と連携する上で重要な場所に立地していたのであろう。しかし、廃城の時期がは明確で、考古学的見地からもその実態は不明なままである。

今後、三宅城推定地周辺での発掘調査によって三宅城の実態に迫ることができればと考える。

註

１）三宅城は、茨木市蔵垣内三丁目に埋蔵文化財包蔵地として「三宅城跡」がある。現時点では、包蔵地内で本調査が実施されていないこともあり、三宅城に関する考古学的な成果は確認されていない。一方、『日本城郭大系』第 12 巻（中村 1981)、『大阪府中世城館事典』(中西 2015)、『図解　近畿の城郭』Ⅴ（高田 2018）などでは空撮写真・地籍図などを基として三宅城の輪郭の推定復元が行われている。城内部の構造については、『細川両家記』・『足利季世記』の記述によっているようである。また『新修摂津市史』第一巻（摂津市 2022）で、野田泰三氏によって三宅氏について詳細に書かれている。

２)「摂津国人三十六人」に三宅氏が含まれるかどうかは定かではない。また「三十六人」は何らかの象徴的な意味合いがあるようで実数ではないらしい（廣田浩治 2017)。また、この段階で西軍へ寝返るのであれば､応仁元年（1467 年）から文明元年（1469 年）の間に東軍へ戻っていたことになる。

３)この史料は｢茨木城｣の初見史料でもある。「三宅城」ではなく「三宅館」と記されていることに何らかの差異があるのかもしれない。

４)『大乗院寺社雑事記』文明 11 年閏９月８日条「摂州ハ平均ニ寺社本所不可沙汰之由国人等一決了」

５）長享元年（1487 年）・延徳２年（1490 年）・明応元年（1492 年）は三宅三郎衛門､明応２年（1493 年)・明応４～７年（1495 ～ 1498 年）は三宅新三郎、明応８年（1499 年）は三宅五郎左衛門が訪れている。文明 13 年（1481 年）及び明応３年（1494 年）は「三宅」とのみ記されている。

６）三宅五郎左衛門は代官任命以前に堀掘削人夫の件で薬師寺長盛を通じて細川政元の命を受けている(史 42)。また『東寺百合文書』では「宗村」と記す。後の秀村、国村と関係を有するか。ただし、出羽守を名乗っていないようである。

７)いずれも三宅新三郎である。ただし､明応７年(1498 年）に逐電した人物と同一人物であるかは不明である。また、永正２年（1505 年）には「新免村代官」と記されている（史 55)。

８)『不問物語』では７月 13 日とされている。

９）三宅氏の通字である「村」は使用しているが、「出羽守」を名乗っていないので、庶家の人物かと考えられている（馬部 2018 ａ)。

10）三宅氏が 12 月以降に再度鞍替えしているのでなければ､大永７年（1527 年）２月時点の三宅城には、三宅氏以外が在城していたのだろうか。

11)「川那部系図」によれば、称願寺住持の梵阿は、本願寺坊官の下間詮頼の子であり、姉妹が三宅国村の妻となっている。称願寺は時宗寺院でありながら、本願寺及び三宅氏と密接な関係を有していたと考えられる。史料には、「梵阿（史 77)」と「珍梵（史 97)」の名がみえる。これが同一人物であるかは定かではない。

12）各史料で微妙な日付のずれはあるが、８月下旬から９月初頭にかけての出来事であることは疑いない。また、証如が「珍重」と記していることから、晴国の自害は本願寺の強い意向があり、９月７日に三宅国村が太刀 20 振を所望した（史 108）のもそれと関連する可能性も考えられている（馬部 2018c)。

13）溝杭村、戸伏荘、水尾村など安威川流域に勢力を持っていたことが窺われる。

14）蓮花寺の他にも複数の寺や堂が周辺に現存し、現在まで多くの美術工芸品（茨木市 2008）が伝来していることにも三宅氏が関与していた可能性もあろうか。

15）勧修寺家に仕えている「三宅氏」の存在が『守光公記』で確認できる（史 72・79)。史 117 も勧修寺

家の「三宅氏」の可能性も考えられる。この「三宅氏」と本稿で対象にしている三宅氏との関係は不明である。

16）史 123 は三宅主計入道から本願寺へ贈られている。

17）史 124 は三宅孫左衛門が使者を務めている。

18）毛氈鞍覆・白傘袋免許は、室町幕府から諸大名らに与えられた免許の一つである。二つはセットで与えられることが多かったようである。鞍覆は馬の鞍骨を覆う馬具で、材質で身分を表象するものとなった。「毛氈」は赤色に染められた舶来の毛織物である。傘袋は長柄の妻折傘を入れる袋である。白晒の麻布の袋に入れて行列の先頭に立てて使用した。室町期は守護大名や御供衆に許されていたが、戦国期はその他の人々にも許されるようになった。三宅国村もそのような一人である。摂津国人では、他に池田久宗（天文８年）、芥川孫十郎（天文 11 年）に許されている（二木 1985）。

19）淀川対岸の八幡を経由していることから年貢は水運を用いて運んでいたのであろう。

20）『長享年後畿内兵乱記』では３月３日に三宅城が落城したとする（史 162）が、他の記録からして日付は誤りである。

21）４月頃と記されているが、他の史料（特に『天文日記』）との関係から日付は誤りであろう。

22）『万松院穴太記』でも江口合戦の経緯が記されている。

23）一次史料ではあるが、史 183 は７月と記す。

24）『足利季世記』では「三宅出羽守国村」とする。

25）この他、年不詳文書として、『今西家文書』236 に「三宅孫四郎禁制」がある。また、『中川史料集』では、天正７年（1579 年）４月６日に「国侍三宅四郎左衛門」、天正 10 年（1582 年）に三宅市右衛門の名が見える。これが、本稿で扱った三宅氏と関連するかは定かではないが、中川清秀が茨木城を預かっていることから、関連する可能性も考えられよう。

参考文献

史料

茨木市 2003『新修茨木市史』第４巻　史料編　古代・中世

茨木市 2008『新修茨木市史』第９巻　史料編　美術工芸

茨木市 2012『新修茨木市史』第１巻　通史Ⅰ

上松寅三校訂 1930『石山本願寺日記』下巻　清文堂出版

北村清士校注 1969『中川史料集』新人物往来社

京都府立京都学・歴彩館東寺百合文書 WEB　https://hyakugo.pref.kyoto.lg.jp

桑山浩然校訂 1986『室町幕府引付史料集成』下巻「賦引付」二　近藤出版社

小泉宜右校訂 2012『経覚私要抄』第８　八木書店

国書刊行会 1914・1915『言継卿記』一・二・四

近藤出版部 1902『改訂史籍集覧』第十三「足利季世記」

真宗史料刊行会 2014 ～ 2017『大系真宗史料』文書記録編４・８・９・10　法藏館

続群書類従完成会 1929『群書類従・第二十輯』合戦部「応仁記」「応仁別記」「細川両家記」

続群書類従完成会 1928『群書類従・第二十二輯』武家部「三好筑前守義長朝臣亭江御成之記」

続群書類従完成会 1928『群書類従・第二十四輯』釈家部「相国寺供養記」

続群書類従完成会 1925『続群書類従・第五輯下』系図部「川那部系図」

続群書類従完成会 1926『続群書類従・第二十輯』上合戦部「瓦林政頼記」「長享年後畿内兵乱記」

続群書類従完成会 1925『続群書類従・第二十三輯』下武家部「永禄三年三好亭御成記」

続群書類従完成会 1925『続群書類従・第三十輯』雑部「厳助大僧正記」

続群書類従完成会 1932『群書類従・第二十九輯』雑部「万松院殿穴太記」

続群書類従完成会 1972『続群書類従・第三十六輯』拾遺部「春夢草［補遺］」

増補「史料大成」刊行会 1965『増補史料大成』第 22 巻「兵範記五・江記・平知信朝臣記」臨川書店

続史料大成刊行会 1967『後法興院記』一　臨川書店

続史料大成刊行会 1967『親俊日記』一　臨川書店

続史料大成刊行会 1967『大館常興日記』一～三　臨川書店

吹田市役所 1976『吹田市史』第４巻

摂津市役所 1984『摂津市史』史料編一

摂津市 2022『新修摂津市史』第一巻　自然地理　先史・古代・中世

太洋社 1934『鹿苑日録』巻一

高槻市役所 1973『高槻市史』第３巻資料編Ⅰ

竹内理三編 1978『増補続史料大成』第 29・31 巻「大乗院寺社雑事記」四・六・八　臨川書店

竹内理三編 1978『増補続史料大成』第 38・42 巻「多

聞院日記」一・五　臨川書店
中世公家日記研究会校訂 2018・2020『守光公記』第１・第２　八木書店
天理大学出版部 1984「大館記」四『ビブリア』第 83 号
東京大学史料編纂所 1918『大日本史料』第六編之十六
東京大学史料編纂所 1920『大日本史料』第六編之十七
東京大学史料編纂所 1954『大日本史料』第七編之十二
東京大学史料編纂所 1913『大日本史料』第八編之一
東京大学史料編纂所 1929『大日本史料』第八編之十四
東京大学史料編纂所 1937『大日本古文書』家わけ 14
東京大学史料編纂所 2001・2011『後法成寺関白記』一・四
豊中市教育委員会 2004『春日大社南郷目代　今西家文書』
奈良女子大学 1991「享禄天文之記」『平成２年度　奈良女子大学教育研究内特別経費（奈良文化に関する総合的研究）報告書』
原田正俊 2011『天龍寺文書の研究』思文閣
広島市役所 1959『新修広島市史』第六巻　資料編その一
明治書院 1971『図書寮叢刊』晴富宿禰記
和田英道 1983「尊経閣文庫蔵『不問物語』翻刻」『跡見学園女子大学紀要』第 16 号　跡見学園女子大学 pp. 61-90

論文・図録など

石本倫子 2009「戦国期摂津における国人領主と地域－摂津国人一揆の再検討を通して－」『ヒストリア』第 213 号　大阪歴史学会　pp. 130-156
稲城信子 2005「興福寺僧・良尊の一筆書写大般若経と戦国期の南都」『日本中世の経典と勧進』塙書房 pp. 205-230
茨木市立文化財資料館 2021『ほとけの心・木のちから－蓮華寺と地域の美術－』
岡田保造 1977「摂津国人三宅氏の動向」『大阪成蹊女子短期大学研究紀要』第 14 号　大阪成蹊大学紀要編集委員会　pp. 1-9
岡田謙一 2012「細川晴国小考」『戦国・織豊期の西国社会』日本史史料研究会　pp. 281-302
鍛代敏雄 2008「淀六郷惣中と石清水八幡宮寺　都市と交通の視座」『戦国期の石清水と本願寺』法蔵館 pp. 65-95（初出は 2007 年）
木村健明 2022「史料にみる茨木城」『茨木市立文化財資料館　館報７』茨木市立文化財資料館　pp. 46-55
柴田真一 2012「永正期の広橋家領について－「守光公記」の記事を中心として－」『地域文化の歴史を往く－古代・中世から近世へ』和泉書院　pp. 138-157
高田徹 2018「三宅城」『図解　近畿の城郭Ⅴ』戎光祥出版　pp. 255-257
高槻市街にぎわい部文化財課 2021『芥川城跡－総合調査報告書－』
田中信司 2019「江口合戦－細川氏・室町幕府将軍の「大敗」とは－」『戦国合戦〈大敗〉の歴史学』山川出版社　pp. 154-182
鶴崎裕雄・湯川敏治 2009「戦国期摂津国における近衛家領」『なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2008』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター pp. 23-39
中西裕樹 2015「三宅城」『大阪府中世城館事典』戎光祥出版　pp. 122-123
中村博司 1981「三宅城」『日本城郭大系』第 12 巻　大阪・兵庫　新人物往来社　pp. 78-79
二木謙一 1985「偏諱授与および毛氈鞍覆・白傘袋免許」『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館　pp. 388-411（初出は 1979 年）
馬部隆弘 2018a「細川高国の近習とその構成－「十念寺念仏講衆」の紹介と分析－」『戦国期細川権力の研究』吉川弘文館　pp. 75-110（初出は 2015 年）
馬部隆弘 2018b「細川晴元に対する交渉と取次」『戦国期細川権力の研究』吉川弘文館　pp. 464-488（初出は 2017 年）
馬部隆弘 2018c「細川晴国陣営の再編と崩壊－発給文書の年次比定を踏まえて－」『戦国期細川権力の研究』吉川弘文館　pp. 538-571（初出は 2013 年）
馬部隆弘 2021「江口合戦への道程－三好長慶と細川晴元の思惑－」『大阪大谷大学　歴史文化財研究』第 21 号　大阪大谷大学歴史文化財学科　pp. 27-36
廣田浩治 2017「文明の和泉国一揆と国人・惣国」『南近畿の戦国時代　躍動する武士・寺社・民衆』戎光祥出版　pp. 58-82
福島克彦 2009『畿内・近国の戦国合戦』吉川弘文館
森田恭二 2006「守護細川氏と北摂津の国人－今西家文書の再検討－」『大乗院寺社雑事記研究論集』第三巻　和泉書院　pp. 41-76（初出は 2005 年）
湯川敏治 2005「公家領荘園の運営機構－近衛家領の荘官をめぐって－」『戦国期公家社会と荘園経済』続群書類従研究会　pp. 207-236（初出は 1986 年）